小　児　科

周産期母子医療センターとしての小児科（新生児科）の役割

小児科医長　山本　順子
Yamamoto Junko

ここ十数年で全国的に産科医の減少とともにお産が可能な産科クリニックが少なくなっており、北九州も例外ではありません。また妊娠から分娩までの間、予期せぬ様々な問題が生じることもあり、妊婦さんのみならず産科医にとってもいつでも安心してお産ができるための連携体制はとても重要です。そしてその周産期医療の中心的役割を担っているのが周産期母子医療センター（産科・小児科（新生児科））であり、当院も認可施設として機能しています。

小児科（新生児科）は院内外の産科と連携をとりながら、その役割を担っています。

当院産科との連携

当院産科には、胎児エコーで異常がみつかった症例が地域の産科クリニックや他の周産期センターから多く紹介されてきており、当小児科（新生児科および小児循環器科）も出生前から産科医とともに診断や治療方針の決定などに関わることで、出生後のスムーズな治療が可能となっています。特に心疾患については診断から内科的管理～手術まで一貫した治療が可能な数少ない施設であり近隣のみならず他県からも多くの症例が集まっています(図1)。

地域産科クリニックとの連携

地域の産科クリニックでは、予期できない分娩時仮死、胎児診断の難しい疾患の出生、出生後に発症する疾患も多くあり、24時間いつでも対応できるシステムをつくって、往診、搬送などを行っています(図2,4)。

図2　新生児搬送の様子

また分娩時の急変に対応できるよう、年数回のNCPR（新生児蘇生法）の講習も開催しています(図3)。

図3　NCPR講習の様子

他の周産期母子医療センターとの連携

上述のとおり先天性心臓病の全管理（心臓カテーテル検査/治療、手術）が可能であるため県内外から心疾患症例の転院が多いのが当センターの特徴です。また新生児の対応が可能な臨床工学技士の協力もあって血液浄化療法を必要とする疾患や、気管切開（耳鼻科）、小児外科疾患などの症例が他の周産期センターから転院してきています(図4)。

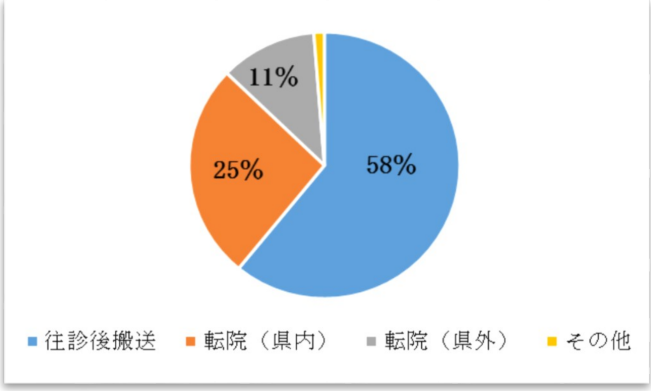

図4　院外出生児搬送の内訳

おわりに

出生前から関わること、新生児期の治療はもちろん、その後、外来で長期間フォローアップをおこなっていくことも、重要であると考えています。

新生児病棟スタッフ共々、新生児期に入院していた児のその後の成長や発達、ご家族の抱える悩みなどを知ることも必要と考え、今年の春、3歳になった児とそのご家族を集めての会を催しました(図5)。

今後も地域の医療機関と連携し、よりよい医療が提供できるよう努めていきます。